



Title	顔之推伝研究
Author(s)	佐藤, 一郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 18(2), 1-23
Issue Date	1970-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33345
Type	departmental bulletin paper
File Information	18(2)_PR1-23.pdf



顏之推研究

佐藤一郎

顔之推伝研究

佐藤 一郎

顔之推の名著「顔氏家訓」については、かつて東京支那学報第一号に、「顔氏家訓小論」としてその思想を紹介した。そののち折りにふれて之推の伝記に関係ある人物をしらべた。その後、周法高の「顔氏家訓彙注」が出版され伝記の研究もすすんだが、この論文は伝中の人物をしらべたところに若干のとりえがあるかとも思うので、顔之推伝研究の蛇足とも思いつつ記述することにした。

1

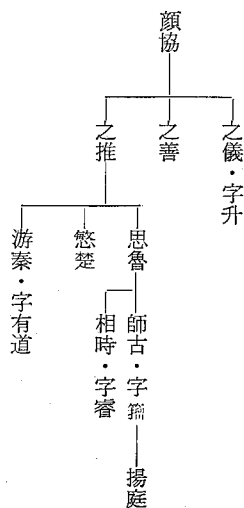
顔之推、字は介、梁の中大通三年（五三一）に顔協・字は子和の子として生れた。彼の一族の本籍は琅邪の臨沂で、西晋の名門であった。九世の祖・含は元帝の南渡に従い、東晋に仕え、西平縣侯に封ぜられ、侍中を拝した。隱退に際して右光祿大夫を加えられ、年九三で卒し、靖侯と諡された。尚、含の祖父の欽は侍中、父の默は汝陰太守になっているから、西晋の名門と言うことは顯らかである。

しかし顔含以後、顔氏は世に出ることはできず、経済力も乏しかったらしい。顔之推の祖父見遠は博学で志行があり、南斉の和帝に仕えて治書待御史兼中丞となったが、梁の武帝の受禪に憤激して絶食し、数日にして死んだ。

(五〇二年)武帝はこれを聞いて、「我れ自ら天に応じ人に従ふ、何ぞ天下の士大夫の事にあづからんや、而るに顔見遠の此れに至るとは、」と言ったと云う。見遠のこの気節は、北周の末期に之推の兄の之儀に再びあらわれるのであるが、これで顔氏は暫らく出世の機会を失う。その子の協、之推の父(四九八年生——五三八年没)はそのために幼くして孤児になったが、若年の頃から器局を以て世人から認められ、草隸の書に巧みであった。彼について南史七十二卷文学伝(下)は、「博く羣書に渉り、草隸に工みなり、協は家貧素と雖も辺幅を修飾し、車馬に非れば未だ嘗て出遊せず、」と記し、又統世説(卷六)には「梁の顔協は草隸飛白に工みにして、荆楚の碑碣、いづれも協の書するところ」とある。彼は父の志を継ぎ、武帝に仕えず、武帝の皇子湘東王繹(五〇八生——五五四没)の鎮西府に仕えて諮議參軍となった。蕭繹は後の元帝であり、その当時より文学の愛好を以て知られていた。大通三年(五二六)に王が荊州に鎮した時には、二九才で正記室に転じている。中大通三年(五三一)、三四才の時に之推が生れた。この年は文選の撰者として有名な昭明太子蕭統が卒し、梁の武帝の政治に漸く衰頹の色が濃くなってきた。しかし文学を好む蕭繹のもとに多くの文士があつまり、大同元年(五三三)にはそれら文士の首領と云はれた劉綬が湘東王記室となっている。顔協がこれらの文士に伍して活躍したことは考えられるが、やがて大同五年(五四〇)四二才で没した。之推九才であった。

湘東王の幕府における顔協の文士としての活躍、あるいはその位置について、直接の記録はないが、顔氏家訓文章第九に次のような記事がある。「吾が家の世々の文章は、甚だ典正、流俗に従はず、梁の孝元(帝)の蕃邸に在りし

時、西府新文紀を撰するも、一篇だに録せられしもの無し、亦世に偶はず、鄭衛の音無きの故を以てなり、……」。更に雜芸第十九に書道の修業について、「真草の書迹には、微しく留意すべし、江南の諺に云ふ、『尺牘書疏は千里の面目』と。晋宋の餘俗を承け相與に之を事とす。故に頓に狼狽するものなし。吾れ幼くより門業を承け、加えて性れながら愛重し、見るところの法書も亦多し、しかるに翫習の功夫すこぶる至るに、遂に佳なること能はざるはまことに分無きに由るが故なり、然れども此の芸はすべらかく精に過ぐるべからず、夫れ巧者は勞して智者は憂ふと。常に人の役使するところとなり、更に累たるを覚えん、」と述べている。これにつづけて能書家の章仲将、王羲之、蕭子雲、王褒の例をあげて、「此れを以て之を觀るに、慎みて書を以て自らに命ずること勿れ、」と云う。先にあげた続世説（卷六）とあわせ考へるに私には顔協は文字を以てはあまり重んぜられず、能書を以て役使されていたと思はれる。顔協の伝は梁書卷五十五文字（下）にある。彼が死するや、元帝は哀惜して懷旧詩を作り、その一章に「孔都多雅度、信乃含寶實、鴻漸殊未昇、上才淹下秩、」とあった。その撰に晋仙伝五篇、日災異圖兩卷があつたが、火災でなくなつたと云う。



既に述べたように、之推が九才になった時に、父は四十二才の若さで没した。その後、彼は二人の兄の教育を受けることになる。「わが家の教育は昔からよくととのつていた。七、八才だった頃から、つねに二人の兄から指導を受けた。朝夕の挨拶、行儀作法、言葉づかい顔つきなど、父上に対すごとく、つつしんだ。やさしい言葉をかけ、何をしたいかをたずね、短所はなおし長所はのばすように、心をくばってくださった。九才にやっとなると、父上はなくなられ、家はめちやくちやになり、人々はいなくなつた。やさしい兄は、大変な苦勞で養育してくださったが、やさしいがきびしいところがなく、指導も身につかなかつた。」(家訓序致第二)。この二人の兄とは、之儀と之善とであらう。

顔之儀、字は升は、「開皇十一年冬卒、年六十九。」(周書顔之儀伝)とあるから、之推より八才の年長である。之善は盧文昭の顔氏家訓補注で、「顔氏家廟碑有名之善者、云之推弟、隋葉縣令、據此則之善亦是之推兄。」とあることによつて推定される。この之善は、おそらく元帝が江陵において西魏のために殺され、有能の人才が連行されたとき、之推とともに移住し、之推が北齊に脱走した後も、北周にそのままとどまつたのであらう。只、之儀や之推に比して才能功績に劣り、正史に名をとどめなかつたと考えてよからう。そこで之儀のみを紹介することにしたい。

之儀の伝は周書卷四十にある。幼いころより穎悟で三才で孝経を讀め、成長すると博く群書をまなび、好んで詞賦を爲つた。嘗つて神州頌を献上し、元帝より賞辭をうけている。江陵陥落までの経歴はわからないが、弟達とともに元帝に仕えていたと思はれる。陥落後長安に連行され、北周と隋に仕えた。周書の記録によるならば、彼は北周の君に忠誠を誓つたと見てよい。長安において明帝(世宗)は彼を麟趾學士となし司書上士に昇進させた。明帝紀(周書

卷四)に「(帝は)幼にして学を好み、群書を博覧し、善く文を属す、詞彩温麗、即位に及び、公卿已下、文学ある者八十余人を麟趾殿に集め、經史を刊校し、又衆書を摺採し、義農以来、魏末に訖り、敘して世譜と爲す、凡そ五百卷、」とある。これに従事したのであらう。つづいて武帝(高祖)が太子を立て、その師傅を選んだとき、侍讀になつた。太子が吐谷渾を征伐したとき過失があつた。鄭譯などは匡正できなかったため処罰されたが、彼はよく諫言をしていたので小宮尹を拜し、平陽縣男に封ぜられた。この太子が宣帝として即位すると上儀同大將軍御正中大夫に遷り縣公に進んだ。

宣帝は父の武帝の不肖の子であつた。之儀は屢々諫めたがきかれなかつた。しかしやめなかつた。帝もいやがつたが、これまでの縁故でみのがしたと云う。宣帝が崩ずると、後の隋の文帝は天下をねらい、まず丞相にならうとして偽の遺詔を作つたが、彼はそれを知つて連署に最後まで応じなかつたし、帝王の符璽を文帝が要求したときも、拒否して危く殺されかかり、ようやく命はたすかり西疆郡守に左遷された。文帝が即位すると都に呼びもとされ新野郡公に昇進した。開皇五年集州刺史になり、翌年交代し、その後仕えず優遊自適した。十年正月に參賀すると帝は之儀を認めて御座によびよせ、その前朝での忠節をめで、錢十萬米百石を与えた。翌十一年冬卒した。年六十九才であつた。

以上の列伝から推定することになるが、之儀は自己を認めてくれた王朝、特に武帝にであつたろうと思うが、北周に節義を以て奉仕した、そういう型の人物であり、祖父の顔見遠に似た人物であつたと言える。尚、この兄とは北周で再会した筈であるが、家訓には何もふれていない。兄弟篇などから憶測するに、何か疎遠なものを感じる。

彼は父の死後、一家困窮の裡に、両兄の被護の下に教育されたが、やさしい兄できびしくしこまなかったもので、家学の周礼と春秋左氏伝を学んだものの、当時流行の美文を作ることに興味をもち、酒にふける青年に育っていった。彼は幼年時代を反省して、「慈兄鞠養し、苦辛備さに至るも、仁にありて威なく、導示切ならず、礼伝を読むと雖も、微しく文を属するを愛し、頗る凡人の陶染するところとなり、ほしいままに輕言し、辺幅を修めず、」(家訓、序致篇)と言っているが、「(之推)年十二、繹の自ら老莊を講ずるに値り、便ち門徒に預るも、虚談は其の好むところにあらず、」(北齊書顔之推伝)とあることによると、後の元帝、当時は江東刺史となっていた繹の幕府に、おそらく父の縁故で被護されていたことがわかるとともに、老年になって書きしるした家訓に一貫して流れる實証主義的な傾向が彼に十二才の頃から存在したことがわかる。家訓にも「(莊老周易は)元帝の江荆の間に在りしとき、おなじく愛習するところ、学士を召置し、親しく教授をなす、寝を廢し食を忘れ、夜を以て朝を繼ぐ、倦劇愁憤するに至ればすなわち以て自釈を講ず、吾れ時にあるいは末筵に預り、觀しく音旨を承るも、性既に頑愚、亦好まざるところ……」と言っている。

太清三年(五四九)十九才の時、彼も若干の自省を شدした。「年十八九、少しく砥礪を知るも、習ひ自然の若くなり、卒に洗盪し難し、」(觀我生賦自注、以下自注とする)。これはその前年に侯景が反乱を起し、都に迫り、太清三年三月に侯景軍が都を完全に占領したことの、彼れ自身への影響の一つであろう。この危機下に繹は彼れを国左常侍に任命し、やがて軍功によって鎮西墨曹參軍とした。その翌年九月に繹の世子の方諸が中撫軍郢州刺史となって郢

州に鎮することになると、彼も中撫軍外兵參軍となつて、その書記をつかさどつた。當時、主將の公子の年は十五才であり、その補左官の鮑泉、虞預は文人であつた上に、郢州は戦線後方であつたため、軍政や防禦を油断し、その翌年大宝二年（五五一）閏四月侯景軍の部將宋子仙と任約の軍の急襲によつて一たまりもなく郢州は陥落し、方諸鮑泉をはじめ之推などは捕虜となつた。その時、方諸と鮑泉は雙陸をしていて情報を信じなかつたと云う。主だつた者は殺害され、之推も再三殺されそうになつたが、一面識もなかつた侯景軍の行台郎中王則の厚意によつて辛うじて助命され、建業に捕虜として連行された。これが彼の人生における第一回目の危機である。

王則の名は、梁書卷五十六侯景伝中に、「（太清元年）十二月（侯）景率軍圍譙城……、又遣其行台左丞王偉左民郎中王則、詣闕獻策、」と出ている王則であろう。北齊書卷二十にある王則伝の王則は、侯景の部下ではないし、北齊の武定七年（五四九）に卒している。同名異人と考えてよい。

建業の都は当時既に侯景のために破壊略奪されて、「野は蕭条として以て骨を横へ、邑は闕寂として煙なし、」（觀我生賦）のありさまで、都に住む名門はこの事件でほとんど滅亡していた。賊の手に陥つた名門の子女、皇太子妃すらが、ただわずかに賊の妾となつて生きている状態であつた。ここでようやく機会をえて彼は、おそらく捕虜の身分のもとであつたろうと推察されるが、祖先代々の顔氏一族の居住地顔家巷のある長干や、代々の墳墓のある白下をたずねている。全く破壊された故郷における自分を、その賦は「長干を経て以て掩抑し、白下に展し以て流連す」と歌っている。

翌五五二年、之推二十二才の三月、王僧辯などの軍は侯景を完全に敗り、「既に侯景を斬り、屍を建業の市に烹る、百姓之を食ひ、肉盡き骨をかむに至る、首を荊州に伝へ、都街に縣く、」（觀我生賦自注）。建業の回復後兵士

の失火により建業の宮殿が焼失したことを、同じ自注でかれはふれているから、当時ようやく自由をえて建業にいたことがわかる。十一月、江陵において元帝は即位し、之推は散騎侍郎奏舎人事となつた。この官は当時あまり重じられなかつたものであつたから、微職であつたと言える。⁽¹⁾ともかく彼はここで再び元帝の下で文学や思想上の教えをうけ、おそらく兄とも相見ええたのである。⁽²⁾この時、司徒王僧辯は建業にあつた秘閣旧事八万巻を江陵に奏上したので、経部史部子部集部の四部のうち、史部の校訂に参加した。この記録（前出・自注）には、「員外郎顔之推」とあるから、前記の散騎侍郎にはそのあとでなつたであらう。

(1) 自宋以来、用人雜、放其官漸替、梁天同、雖華選比侍中、而人終不見重。（唐六典卷八、左散騎常侍注）。

(2) 北周書顔之儀伝。かれが神州頌（或は荊州頌）を献上したところ梁の元帝より手勅をたまわっている。

平和の回復とともに、江州で客死した両親の墓をたてることが計画された。元帝より勅許と銀百兩の下賜があり、既に揚州の郊北の小地で瓦を焼いて準備をすめていた。しかしこの平和は短かく、再び戦乱のためにさまたげられ、之推兄弟はこの地に一生の間、もどることもかなわず、費用の工面もかなわず、希望はたされなかつた。家訓終制篇ではその不孝を欲き、せめてもの償いに親よりもあまり手厚い葬り方をしないように息子達に切にさとし望んでいる。

この時の戦乱は、西魏（後に五五七年、北周となる）による江陵の陥落と破壊略奪、元帝の殺害、之推兄弟とその家族の西魏への強制移住をもたらした。すなわち元帝の承聖三年（五五四）之推二十四才のときである。先年の侯景の乱において、数的に圧倒的な梁軍がみすみす武帝のこもる都城の陥落を見すごしたのは、救援にきた諸王子間の反目対立によつたのであるが、このときも岳陽王督はかねがね不和である元帝に対し、西魏に降つて、その兵を導入

した。西魏の大兵はこの機会をとらえて和親をやぶり、不意に理由なく江陵を攻撃した。西魏軍が江陵に到達したとき、武帝は龍光殿で老子義を講じていたが、敵襲の判断が内応者によって誤まれた、大丈夫だがともかく念のためにと言うので、百官は武装のまま講義を聴聞したと云う。その夜、都は包囲されたが帝は詩を作るなどして悠々たる文人ぶりであった。だが内応者によって魏軍は侵入し、あつけなく都は落ちた。

この戦争について自注では「孝元与宇文丞相断金講和、無何見滅、是師出無名。」と述べ、周書于謹伝は「梁元帝密与齐氏通使、将謀侵軼。其兄子岳陽王胥、以元帝殺其兄嘗、據岳陽來付、仍請王師。乃令謹率衆出討、旬有六日、城陷、梁主降、尋殺之。」とある。

元帝は既にふれたが、侯景を破ったのち、建業に集積されていた図書をその好學癖から江陵に移していた。青年時代からの収集書とあわせてその数は十余万（一八万卷とも云う）にのぼった。「北朝の墳籍、江東の三分の一より少なし」（自注）と之推は言っているが、その全てがここにあつたのである。しかるに元帝は落城にあたってその書籍を外城で焼きすて、宝劍を柱にうちあてて折り、「文武の道、今夜窮せり」と歎じ、或は焚書について、「書を読むこと万巻にしてなお今日の事あり、故にこれを焚く」と好學の末路を自嘲したとも伝えられる。この焚書中から助かった本は十中の一、二と云う（隋書牛宏伝）ことであり、全中国にこのため図書館はなくなり、南朝で典籍に遺闕するものが多いことになった。

（注）元帝撰、金樓子聚書篇によれば、四十年間で凡そ八万卷をあつめたと云う。

（追記）之推に影響を与えた人物として、この元帝とその周囲の文人達が問題となるが、文学の問題でもあるので、ここでは特に考察しない。参考論文として「顔之推の生活と文学観」村田慎之助（日本中国学会報第十四集）をあげたい。

先に侯景の乱における武帝の死、今回の元帝の死という都の陥落を伴う事件によって、二度目の国家の崩壊にかれはぶつかったのである。これによって支配者の老莊思想愛好についての批判が、かれの家訓にでるのも当然であるが、さらにこれらの戦乱で目撃した無能にして遊情な貴公子達の末路は、きびしい教訓を与えた。家訓勉学篇に「学芸のある者は、どこにいても安泰である。戦乱からこのかた多くの俘虜を見ているが、代々の庶民であっても、論語孝經を読むことを知っている者は、ともかく先生になれるが、先祖代々の貴族であっても、読み書きをできない者は、すべて田を耕すか馬を飼うかをさせられている。」とある。

3

この征服によって西魏は南朝累代にわたって蓄積された一切の財宝文物を収奪し、王公以下を俘にし、一般人民男女数万を奴婢として三軍に分賞し、小弱者はすべて殺したと云う。「あかごに何の幸ありやと憐み、老疾の無状を矜れむ。これをこれを懷より奪ひて草に棄て、塗につまづきてむちを受く。」（觀我生賦）。この非惨な俘虜群中にとにかくも生命をたすかつて、之推はその家族と共に入っていた。江陵の陥落は十一月であったから、きびしい冬の寒氣の中を脚氣に悩みつ、険しい西魏への山路をよぼよぼの馬に策っていたのである。馬を与えられたのは、今日から見ると厚遇ということになるが、しかし周以後六朝にいたるまで従僕をのぞいて官吏の乗馬は風儀を失すること、貴族にあるまじきことであった。おそらく病氣の彼を連行する必要からのことでありその意味で彼の能力がある程度は評価されていたのであろう。

俘虜になった梁の貴族たちは、奴隸身分にされ、その能力によって酷使された。北史卷八十九庾季才伝によれば、

初め江陵が陥落したとき貴族達は多く奴隷にされた。季才は自分の賞与を人に与えて縁故者を購入した。周の文帝はなぜにそうするか問うた。季才は、江陵の滅亡は君主の責任で、貴族達に罪はありません。皆が奴隷にされ、誠に衰れと思いますので、身代金をはらっているだけでございますと答えた。文帝は悟られて、「君がいなければ、天下の信望を失った。」と言われて、命令を出して梁の俘虜で奴婢になった数千人をゆるされたと云うことである。この庾季才は江陵の人で、元帝に仕え中書郎となり太史の職にあった。陥落後は周の文帝に認められ太史の職を参掌させられ、「卿よろしく誠をつくし孤に事ふべし、まさに富貴を以て相答へん、」と言われている。北周の文帝、あるいは武帝などが有能な梁の人士を挙用せんとした事情がわかるとともに、無能な貴族の惨状を知ることができよう。

之推の場合は、兄の之儀たちが長安に連行されたのと別れて、弘農（函谷関）に行くことになった。これはその才能を大將軍李顥に重んぜられ、その兄の陽平郡公李遠の書記を当るようにさせられたためである。認められた才能とは書記としての事務能力であった。

西魏にとどまること一年、北齊が抑留されていた梁の謝挺、徐陵などを帰国させ、つづいて貞陽侯蕭淵明を梁の君主として送りこんだとの噂が、弘農にいる彼のもとにとどいた。五五四年十一月に元帝が捕えられ、十二月に害されるや、梁の王僧辯、陳霸先は晋安王方智を奉じ、翌年二月に建康で即位させ敬帝とした。ここへ、三月に齊は淵明をおくりこんだのである。若干のゴタゴタの後、王僧辯は淵明を迎えいれ帝とし敬帝を太子とした。七月のことである。しかるに九月に陳霸先は王僧辯を襲撃して殺害し、淵明を黜け、敬帝を復位させた。五五五年、之推二十五才の年にあったこのような梁国内部の激動は、その前半のみが伝わったのである。おそらく、西魏にとって三国鼎立の状態において、梁と齊の連合がもっとも重大事であったためと思はれる。

之推のいた宏農は黄河に沿ひ、長安を敵国から守る前線根拠地であつたから、舟に乗つて河をくだり、難所の砥柱を突破すれば易々として北齊勢力下の洛陽あたりに到達できた。齊を経て梁に帰ることは可能になつたと思はれたのである。かくて丙子の歳（五五六）の元旦に筮にうらなうと、「泰の坎に之く」に遇つた。これに力をえて機会をまつうちに、「河水のにわかになつたのにより、船を準備して妻子をたずさえて齊にむかい、砥柱の難所を通つたので、時人はその勇決をほめたたえた。」（顔之推伝）。黄河の水は通例陽曆では六月から十月にかけて増水するから、そのうちの好機をねらい一夜のうちに決行したのである。「昏に船を分陝に揚し、曙に纜を河陰に結ぶ。」（觀我生賦）、又「水路七百里、一夜而至。」（自注）によつて彼の勇敢な壮舉が事実とわかる。彼はこのとき妻子をつれていたが、長男の思魯はその命名より見ると、この抑留中に生れていたのであろうか。次男の慙楚は、単に江陵の事件をふんまえるというよりも、梁から陳への王朝交代（陳霸先が即位したのは、この翌年五五七年十月のことである。）の反映ではなからうか。三男の游秦の名はどうしても齊の滅亡後における周への移住の反映と考えられ、その証拠は、北齊書顔之推伝の「之推在齊二子、長曰思魯、次曰慙楚、蓋不忘本也。」である。

之推には妻子のほか、同行者がいた。家訓帰心篇に、「江陵の高偉、吾れに随いて齊に入る、凡そ数年、幽州の淀中に魚を捕ふ。後に病む。病むごとに、つねに群魚の鬻るを見て、死す。」と因果話の例にされている高偉は、漁師であつて、江陵から連れてこられ、故郷を恋うて之推に同行し、おそらく脱出行の船を操つたのであろうか。

夜間、たとえ高偉以外にも水路や船のことにくわしい人がいるにしても、河をくだることはきわめて危険である。顔之推、高偉などの望郷の念のつよさを知りうるのであるが、それとともに宏農での生活のきびしさと看視の厳重さを指摘したい。それは彼の主人の李遠について、周書卷二十五において宏農のことを、「遠は善く綏撫し幹略あり。

守戦の備、精銳ならざるなし。つねに厚く外人を撫して間諜たらしめ、敵中の動靜、必ず之を知る。事の泄れて誅戮せられし者あるに至るも、亦以て悔となさず。其の人心を得ること此の如し。」とあるからである。

脱走に成功して齊に來たものの、この年には既に齊と梁の陳霸先とは交戦状態になっていて、文宣帝高洋は十万の大軍を以て南下したものの、陳霸先はこれに大勝し、やがてその翌五五七年冬に梁の天下をゆずりうけて陳が興った。齊で待つうちに梁は亡び、彼は亡国の臣として齊に身をよせることになる。文宣帝は彼を得て奉朝請に除し、宮中にひき入れた左右にはべらしたと云うが、この奉朝請は無官の大夫というところ、北齊の起家の官である。北齊の天保九年（五五八）六月、帝は祁連池に遊獵し、それに伴したとき、中書舍人に任命し、中書郎段孝言に勅書をもたして之推に示めさせたが、このとき之推は營外で飲酒していたので、このことを孝言が報告すると、帝は「しばらく中止せよ」と言われて、これでこのことはそのままになった。この事件は之推二十八才のことであるが、彼の飲酒が悪い結果をもたらした例であり、酒でも飲まねばならなかった彼の心境を憐んでやりたい。更にこの失態を上秦した段孝言という齊の勲門貴族の漢人文士への悪意を見るのである。

当時の彼には南朝の文化人としての気負いがあり、それが彼の足をひっぱったことも考えられる。家訓文章篇に、「江南では文章を作ると人から批評してもらい、欠点があるとわかれば、すぐにでも改める。……。しかし山東の風習では批評はしないのだ。わたしがはじめて鄴に來たころ、このことで人の感情を害してしまったことがある。今でも後悔している。おまえたちは絶対にかるがるしく批評してはならぬぞ。」

この頃よりようやく北周と北斉の攻守が、そのところを代え——五五七年北周興り西魏亡ぶ——、北周と突厥の連合軍に対しよく防禦するものの、北斉の軍事情勢は多事多難になっている。一方政治面では、北斉君主の暗愚、佞臣の跋扈がつづくとともに、法制的にととのつてきて後の新しい隋唐官僚制度の萌芽がでてきた。又、河清三年（五六四）律令を頒布し田賦を制し、天統二年（五六六）に県令に士人を任用するなど後世に大なる影響を与えている。

（注）北斉書卷三十八、元文遙伝。北魏及び北斉では士人が県令になることを恥としていた。

五六五年に北斉の後主高偉が即位するとともに、その柔弱な性行とかれをとりまく側近の寵臣の汚行とにより、顔之推を含む漢人官僚と征服階級出身の官僚との対立抗争、或は別の視点からみれば、自己の能力（特に文才と能書）により最高権力に近づかんとする新官僚と、勲門出身あるいは佞幸の臣などとの対立抗争——勿論この分類は截然としうるものでなく、相互にかさなり合うものであった——が激化し、斉の国力はいよいよ崩壊の運命をたどる。この対立抗争に隋唐以後の権力闘争の原初的多彩性を認識し、その考察から顔之推が体認し子孫に書きのこした顔氏家訓の社会的性格と、その進歩性の根源をさぐっていくことにしたい。

北斉の末期に之推の活躍の全盛期が来るのであるが、それまでの間の之推についてはあまりくわしいことはわからない。五五八年の行幸で出世をのがしたが、この行幸において家訓の記事からみると太原の王邵との交際が注目される。「わしがむかし斉の君が并州への行幸にお伴したとき、井陘関より上艾県に入った東のかた数十里に獵閭村があ

って、そこで百官は馬糧をうけた。晋陽の東、百余里の亢仇亭の側にあるが、この二個所がもとの何処かはぜんぜんわからない。いろいろしらべたが全くわからない。字林韻集をしらべてやっと猗閭はもと猗餘聚、亢仇はもと猗谿亭で、いずれも上艾県にあることがわかった。時に太原の王劭が郷邑記注を書こうとしていたので、この二つの地名を教えたら大いに喜んだ。」(家訓勉学篇)。更に北齊書本伝に「河清末(五六四頃)、趙州功曹參軍に任用された。」とあるが、家訓書証篇に「わしが嘗って趙州の佐となつたとき、太原の王劭とともに柏人城西門の内側の碑を読んだ。」ということ、碑文中の山名を諸々の字書から校証しその結果を「郷にいつて魏収に説明したら、収は大いに嘉歎した。」という話がのっている。

王劭は太原晋陽の人で、父の松年は齊の通直散騎侍郎である。五五四年に魏収が魏書を文宣帝にたてまつたとき、非難をしたので帝から処罰されたことがある。劭は少年時代より寡黙で読書を好み、弱冠で尚書僕射魏収にみとめられ、参開府軍事からやがて太子舍人待詔文林館に累遷した。魏収は大寧元年に開府、河清二年(五六三)に右僕射になつてゐるから、王劭は二十才前後に之推と交際してゐたことがわかる。彼は待詔文林館時代に「博物」について世の識者から認められたことがあり、齊より周になると不遇であつたが隋では文帝に認められ、著作郎となり起居注を修めることに従事し、帝の意をたえずむかへることに努め、煬帝のとき官は秘書小監にすすんで没した。經史の謬誤を採摘して読書記三十卷を撰した。時人はその精博に服したと云う。之推はおそらくこの王劭などと、この不遇の時代を考證的な研究に従事してゐたと思はれる。その成果は家訓の書證・音辭などの篇にやがてあらわれることになる。

(注) 北齊書卷三十五、王松年伝。隋書卷六十九、王劭伝。北齊書卷三十七、魏収伝。

之推が趙州功曹參軍より待詔文林館になり中央政界に登場するまで、八年ほどの歳月が流れた。この間のかれの心境について家訓はふりかえって、「三十以後は大過は稀れになった。」（序致篇）と言っているのは、この間の苦勞のことであろう。後主が即位して、かれの尊敬する祖珽が執政となつて、武平三年二月文林館が設立された。四十二才のときである。かつて梁において大同七年辛酉（五四一）、之推十一才のとき、武帝によつて士林館が設立され学者が集められたが、文林館は齊において遙かに広く且つ名譽を以て文士があつめられた。この設立に主謀者となつたのは之推であつて、蕭放と共同し、執政の祖珽を動かし、更に宦官の鄧長顗によつて後主にだんだんに説かせ、後主の心が文学にかたむくのをまつて祖珽が上奏して設立に成功したのである。之推の主旨は長老の貴人を入れたくなかつたが、高官の陽休之は少年の朝請や参軍たちと一緒になつて待詔になつたといふほど北齊での文化熱をあふつた出来事であつた。

（１） 設立年代について家訓彙注の説によつた。

（２） 梁書武帝紀（下）、陳書虞荔伝。

（３） 北齊書卷四十二、陽休之伝。

顔之推が最も尊敬している人物の一人がこの祖珽、字は孝徵、范陽狄道の人である。父は魏の護軍將軍で、かれは秘書郎として名家の子弟らしく仕官の第一歩を初めた。「神情機警、詞藻適逸」で若くより令譽を馳せ、世間より認められていた。しかし性は疎率で、廉慎して道を守ることではできなかった。しばしば官物横領、窃盜をなし、婦人関係も修まらず、楞蒲を好んだ。罪が発覚しても悔悟の色もなく、処罰をうけても、その文才を以て免るされてゐる。北齊書卷三十九の記述は、若き彼を性格破産者の如く記する。そしてその惡行を列挙する。しかし個々の事件・

行為を見ると、「性不霸放縱」と言はれる如く、若き英才がそのエネルギーのはけ口に困まっていたの仕業に思われる。常に云う、「丈夫一生、不負身已、」と。彼の才能は諸々の伎芸で通ぜざるはなく、單に文章にすぐれていたのみでなく、音律を善くし、外国の言語・陰陽占候医薬の術も解した。

道德律を無視しうるこのような人間は如何なる方法で政權に近ずいていったか。後に武成帝（五六一—五）となった高湛が長成王であった時に、やがて彼が帝位をうることを預言して歡心を買ひ、果して即位するや、擢んでられ中書侍郎となった。安德太守、齊郡太守と転じ、再び朝廷にもどり太常小卿散騎常侍となり、詔詔を掌ることから常に接近し、その意をむかえることに努めた。後主高緯の皇位繼承を和士開と結んで上奏し、更に親任をうけた。ここに昇進して秘書監となり、武成帝と後主とから親寵されたことから、宰相たんと志し、まず黃門侍郎劉逖と仲よくなり、そこで侍中尚書令趙彥深、侍中和士開の罪状を列挙して、逖をして上奏せしめんとしたが、逖が懼れて上奏しなかった。これがもれて光州に徙され、地下牢で失明するにいたった。やがて武成の崩御により、後主は彼を憶つて海州刺史にした。当時、後主の乳母の陵令萱（陵嫗、後の穆後の養母となる）が勢力をふるひ、その子の穆提婆——母が穆昭儀——穆後の養母となったので、その本姓駱を穆に変更した——が親幸されていたので、書き送つて趙彥深に対する警戒を説いた。和士開も彼の才能を認めて謀主としようとして旧怨を捨てて、陸嫗とともに後主に彼の功績と能力を説いたので、再び朝廷に戻り秘書監となった。和士開が死するや、武平二年（五七一）陸嫗に説いて趙彥深を地方に出し、自らは侍中となり、武平三年二月尚書左僕射、七月己れに反感を有する左丞相斛律光を叛亂罪で誅殺し、勢位は朝廷をおおった。八月その娘斛律皇后を廢し、胡氏を皇后とした。この処置はその外威の力を借らんとしたもので、つづいて權臣高元海を左遷し、これより文武一切の大權を掌握し、和士開が執政となつて以来、乱れていた政

家を漸次に滅亡に導き、四十七才の冬に北周は齊に攻撃を加え、晋陽は陥落し、内応はあいつづいた。この危機に際して之推は鄴都での一戦に敗れたら陳に逃れることをすすめた。後主は彼を平原太守に任じ退路の確保にあたらせしたが、遂に後主は北周にとられ北齊はほろんだ。五十七年である。かくて之推は周の武帝の同伴として長安におもむく齊の文官十八人の中に加えられ、周に仕えることになった。大象末（五八〇年頃）御史上士となった。隋になると開皇二年（五八二）に、官中の雅楽に胡樂がつかわれていたが、梁國の樂をもとにして古典から研究し作ることを上秦したが、文帝は拒否して、「梁樂は亡國の音楽、なんぞ我が用に立たんや。」と言った（隋書音楽志中）。この頃かれは命令により秦時代の鉄の称權の銘の文字の解読をしたり、南北や古今の音韻についての討論をしている。^{（注）}政治的に失意の状態において、何がかれをささえたか。それはかつて齊において三十代のかれの悩みをまぎらせたものが五十代で再び役に立ったのである。

（注）家訓書證篇。陸法言、切韻序。

かれを慰めたものに開皇元年に之推の長男思魯に子が生れたことである。後に漢書の注釈者として有名な唐の大学者顏師古である。三人の男の子と、その孫にかれは希望を託したのである。家訓勉学篇に、関中にうつされたのちの話として次の記事がある。

「鄴が征服されて関に徙された。思魯があるときわしに言った。朝廷に禄位もなく、家に積財もない、労働して孝養すべきです、つねづね課業が多く経史に苦勞して、子供の本分もつくせない、おちつけませんと。わしは言いきかせた。子供は孝養を心とし、父は学問させるものだ、汝が学を棄て財産をえて、わが衣食をゆたかにしてくれても、めしもうまくないし、着物もあたたかくない、もし先王の道に努力し、家の学問をつぐなら、粗衣粗食でも、わしは満

足だぞと。」

その末年、之推は太子に召され学士（露門学士？）となり、六十才すぎまで生きていた。彼の子供思魯・游秦・孫の師古、その子の揚庭は唐書、新唐書にそれぞれ伝がある。次男の愍楚の一家は隋末の乱で賊に噉われた（旧唐書卷五十六・朱粲伝。）と伝えられることはいたましい。

（追記）北斉末年の漢人官僚、特に誅殺事件にからむ人々について述べたかったが、本論文の性質上、割愛した。彼等の立身の経緯には唐宋の官僚の活動のめばえを示めすものがあることを、一言ふれておく。但し彼等の時代の制約も強いことは当然である。